HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 世界の諸相（一）：「遠い関係～此処とどこかほかの場所との間～」（2015） |
| 著者 | トゥメロ，モサカ; Tumelo，MOSAKA; 鈴木，光; SUZUKI，Hikaru |
| 引用 | 北海学園大学学園論集(175)：(1)-(5) |
| 発行日 | 2018-03-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 世界の諸相（一）

## ――「遠い関係～此処とどこかほかの場所との間～」（２０１５）――

トゥメロ・モサカ（Tumelo Mosaka）　著
鈴木　光（Suzuki Hikaru）　訳

諺にもある通り、人は誰も島ではありません（“no man is an island.”）[訳注1]。二十一世紀における最も顕著な社会問題の一つが移住です。今ほど、この（人は誰も島ではないという）表現が明らかになったことはありません。資本と物資は国境を越えて行き交う一方、人々の移動はまだ制約されています。しかし、それぞれの国へ流入する人々と他国へ移り住む人々の数が増加するにつれ、文化的アイデンティティはより複雑になり、それを定義づけたいという願望は一層緊急のものとなっています。世界中でより多くの人々が避難するようになるに伴い、国境は抜け穴が多くなり、もろく不安定になります。虚弱な政府の政治にはどのような未来が待ち受けているか、見通しが立たなくなってきました。

移住者にとり、居住地を変えることは、喪失、疎外感、そしてしばしば孤立と向き合うことを意味します。自らのアイデンティティ、国籍、および居場所の問題を交渉する移住者は、敵対的になる一方の政策や認識と闘わなければなりません。これまで長らくの間、移住に対しては消極的な見方が普及してきましたが、最近の対立により、一般大衆は、誰が中に入ることを許され、誰が外にいなければならないのかについて、より大きな関心を抱くようになりました。しかし欧州の保守派の間で高まりつつある民族主義（nationalism）は、それらの諸国はかつて外国と出会ったという歴史を有し、植民地的暴力という遺産（遺物）を通じて建設されたものであるという事実を無視しています。アメリカ合衆国も然りで、不法入国を減少させる目的で不法移民に対する国境政策を強化してきました。しかしこうした活動は、国境を越える人々の動きの現実を無視しており、その動きを完全に食い止めることは不可能です。とくにアメリカ合衆国政府は、合衆国軍を公然と使うことはせず、国際競争から国内生産物を保護するため、補助金を増額し貿易障壁を作ることで、合衆国の農業従事者にとり有利となる経済政策を実施してきました。また諸外国の政権交代を支援するため反体制派グループに資金を援助したり、彼らを訓練したりしてきました、こうしてアメリ

カ合衆国政府は、不法入国を助長する条件を自ら作り出してきたのです。一方、資本と物資は国境を越えて流れ続け、人と人とのつながりは次第に技術的・情報的なネットワークに取って代わられつつありますが、人々の間の、実際または想像上の接触域には、依然として、植民地主義と帝国主義が及ぼした影響（の問題）に取り組む諸国間の取引に関する、否定しがたい現実が残されています。今日の移住の挑戦には、他者が私たちのことをどう考え、私たちは自分自身のことをどう考えるかという側面が含まれるのです。

マルティニーク島[訳注2]の作家であり、哲学者かつ詩人でもあるÉdouard Glissantは、その著書『関係の詩学（*Poetics of Relation*）』において、アイデンティティ形式の新たな検討方法として相関的性質（relationality）を提案しています。Glissantによると、言語は文化を表し、それを運搬する機能を果たします。言語は、たとえばフランス語のように、特定の文化を象徴するとともに、まさにマルティニーク島においてフランス語がクリオール人風に変化しているように、その文化の特性が複雑に入り組む舞台にもなります。Glissantは、カリブの経験の複合的性質を例に挙げ、物理的・地理的な境界線の中に固定されたものというよりはむしろ、変化する力と適応性を有するものとしてアイデンティティを研究しています。彼は文化を、一律で排他的または明白な存在と理解するのではなく、矛盾と異種混成を認める不明瞭な概念であると主張しています。マルティニーク島の文化は、同島の歴史を形成する超国籍のネットワークとつながっており、極めて独特です。カリブは、植民地主義の歴史を有するがゆえに独特な文化を欠いており、圧制（oppression）が戦略上重要な積極的特質に変わるのです。文化的接触がもたらす結果は未知数なので、アイデンティティを原則的に理解することは避けています。

Glissantは、他者と出会う条件の不明瞭さを是認することにより、文化共存に基づく合理性を考察しています。本展覧会は、（Glissantの）多様性、分裂、および現代的経験との異種連結を前面に押し出す手法に賛同したことから、Glissantの著書名を拝借してこれを展覧会の名称に冠し、民族性と国家的アイデンティティに関する排他的モデルに異議を唱えようとするものです。本展覧会には六名の国際的芸術家が参加し、世界につながるネットワークが日常生活に及ぼす影響と効果をそれぞれ検討します。彼らは政治、歴史、媒体、及び芸術といったさまざまな記録簿を引き寄せながら、移住、アイデンティティ、およびその本質において根本的に関係している少数異教徒集団を批判的に検討します。

Hurvin Andersonは、写真、切り貼り、および描写など、さまざまな手法を用いて絵画を制作します。Andersonはジャマイカ人の両親のもと、英国に生まれました。彼は、家族との思い出を通じて、カリブという場所に対し、親しくもあり遠くもある愛情を抱いています。Andersonはまた、公共公園や商業地区のような場所で、カリブ移民と関連する歴史の蓄積を探し出すことで、英国におけるカリブの空間（spaces）を同定します。Andersonは、その絵画作品の中で、カリブと英国の風景画像を結合し、現実と想像上の環境を融合させた第三の空間を作り出しています。そうすることでAndersonは、場所というものに関する我々の経験を形作る、無数

の歴史を明らかにするのです。

Zarina Bhimji も同様に、植民地の歴史を通じて、風景がどのように変化させられたかを探求しています。Bhimji は、インド人の両親のもと、ウガンダに生まれました。Bhimji の詩的な映画作品は、植民地主義の暴力とトラウマ、およびその後まもなくポストコロニアルの余波に浸された状況を描き出しています。Bhimji は、インドとアフリカ東部において、廃墟と化した建物や商業地域に焦点を当てていますが、特定の出来事や歴史のイメージに固着することは避けています。Bhimji は、光、色、構成、および音に細心の注意を払いつつ、風景を通じて、ある政治的な意識を明確に表現しようとしています。彼女の視覚連鎖は、文字と抽象の間、および具体的なものとはかないものの間を行き来します。それらは（何か）はっきりとした物語を作り上げるというよりはむしろ、現在も心に付きまとい続ける植民地の遺産（遺物）と密接不可分の空間がいかに強烈なものであるかを伝えています。

Yto Barrada は、もともとは写真と映像で作品を作る芸術家ですが、今回は欧州南部との不平等貿易を通じて変形させられてしまったアフリカ北部の強烈な風景を調査しています。とりわけ Barrada は、植民地化と発展が、国内外の移住の双方をいかに促進したかを検討します。かつて移民労働者たちは、欧州の経済成長に不可欠な存在と考えられていましたが、最近の欧州では、移民労働者の流れを徹底的に制限する政策がとられています。こうした政策の結果、欧州では証書の交付を受けていない移民の数が増加すると同時に、アフリカ北部の人々が故郷では権利を失う事態が発生しています。Barrada はパリに生まれ、タンジェ（Tangiers）[訳注3]とフランスの間で育ちました。彼女の作品はそうした移住パターンの社会関係、とりわけ欧州からモロッコへ向かう逆移住および観光客の旅行の影響を探求するものです。彼女は都市風景を熟考することで、経済・政治およびアイデンティティが複雑に絡み合う現実と向き合い、モロッコ人には封じ込め政策がある一方、西側諸国からの観光客には自由に移動できる特権があることとの不均衡を批判的に検証します。

今回の展覧会では、多くの作品の中で、分離と融合の象徴として水が用いられています。ドミニカ共和国に生まれ、同国を本拠地として活動する Tony Capellán は、海洋が、あるときは貿易と植民地化の障壁として、またあるときは主要な道路としてその役割を果たしてきた様子を探究します。彼は、彼の最も身近な環境から影響を受ける形で、自身の芸術活動を行っています。彼は海岸線沿いで漂着ゴミを集め、審美的に強烈なインパクトのあるインスタレーションを制作し、カリブ文化に関する歴史や神話を検証します。たとえば彼は、*Mar Caribe*（Caribbean Sea）（1996/2015）の中で、捨てられたサンダルの革ひもを有刺鉄線に取り換え、歴史的でもあり、しかし現在も続いている暴力と痛みを呼び起こしています。それらのサンダルは静穏な水を思わせる波状に配置され、青海原を思い起こさせます。しかし Capellán は、これらの捨てられたサンダルを、間に合わせの船に乗り、モナ海峡（Mona Passage）[訳注4]の危うい水域を横切ってプエルトリコへ渡ろうと試みて命を落とした幾千もの無記録のドミニカ人たちと結びつけているのです。熱帯の楽園の画像が、即座に、その島の文化を形作ってきた喪失、暴力、およびトラウマ

を呼び起こすものへと変化するのです。

Xaviera Simmon の写真によるインスタレーション *Superunknown (Alive in The)*（2010）は、危険な通路を横切ろうと試みる多数の移民が登場する悲劇的な旅を描写する際にしばしば用いられる記録映画的な手法を、批判的に検証します。このインスタレーションは、遺体を満載して海上を漂う孤独な船たちを描写する写真画像の繰り返しにより構成されます。Simmon は、ニューヨークを本拠地とし、インターネット上の様々な情報源から画像を借用し、それらを巧みに処理し、現存する視覚的比喩、たとえば、大西洋を横断して行われた奴隷貿易によるトラウマと絶望に関するものを訴える方法を詳細に述べます。Simmon は、様々な歴史、遺産、および象徴的な言語の間のつながりを呼び起こすことで、移民に関するイメージの中身のみならず、その意味を作り上げてきた構造にも疑問を投げかけます。

南アフリカ共和国の芸術家 Ledelle Moe は、かつて集団的アイデンティティを捏造し、統一化するために建造された物理的記念碑に関するイデオロギーを取り壊すことに焦点を当てています。彼女の作る頭部状のコンクリート彫刻作品は、大きくどっしりしており、ナショナルイデオロギーに用いられるために建てられる記念碑に似ています。しかしそれらは、まるで古代文明から転がり落ちてきて、現在は廃墟の中に取り残されている記念碑のように座っています。Moe の主張のポイントは、南アフリカ共和国の風景の歴史的変遷にあります。（そこでは）ある一つの公式な文化的アイデンティティが、一連のほかのもの、すなわち結果としての過去のアパルトヘイト記念碑の代替物となるほかのものに取って代わられてきたのです。Moe の作るうつむき加減の頭部は、古い建築物はいずれ不適切なものとなり、ありうる未来は依然として不明確であるという歴史的危機をはっきりと示しています。記念碑は、公共空間を意味あるものとし、変形させ、政治権力を正当化するための力強い舞台になります。Moe の彫刻作品は、その規模と質量を通じて、この言語を採用していると言えます。しかしそれら（Moe の彫刻作品）は、もともと壊れやすく、分解したり再び組み立てたりすることが可能なモジュール式の部品から成り立っています。何かを記念するという行為とその終了は、Moe が行っている、記念の習慣と儀式につきものの傷つきやすさの検証の中核となる部分です。将来の国のあり方という観点から、何が明らかにされ又は何が忘れられるのかを考えることは、市民のアイデンティティとその政治姿勢についての関心をおのずと高めます。

格言「人は誰も島ではありません」は、島を孤独の象徴と仮定しますが、『関係の詩学（*Poetics of Relation*）』は、実際には、島は遭遇と文化交流の特権的地点であることを示唆しています。島の文化は、水に囲まれてはいるものの、様々な移民の流れによって形作られており、地球を具現化しているのです。それゆえ我々は「人は誰しも島である」と言うことができます。一つ一つの場所にも発展力があります。多数の島と多様な文化が集まれば、群島を作り上げるからです。本展覧会の作品は、アイデンティティの伝統的表現を（あえて）粉砕・分解し、不連続性と多様性を用いて（アイデンティティを）構成する手法もあるのではないかと提案しています。これらの

作品は、ありふれた矛盾や緊張を目に見える形にしてくれる多様な視点を主張しつつ、過去と現代の間の具体的な対話を私たちに思い起こさせるのです。

## 訳注

（訳注1）　転じて「人は一人では生きられないものです」と訳されることもある。

（訳注2）　西インド諸島中のフランス領の島。

（訳注3）　モロッコ北部の都市。

（訳注4）　西インド諸島のイスパニョーラ（Hispaniola）島とプエルトリコ（Puerto Rico）島の間の海峡。大西洋とカリブ海を結ぶ。幅は約一三〇キロメートル。

## 訳者あとがき

南アフリカ共和国出身の気鋭のキュレーターであるトゥメロ・モサカ（Tumelo Mosaka）氏は、ヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、アフリカなどで多数の現代美術展を企画し、現代社会が抱える複雑な諸問題を斬新な視点で表現しています。本稿は、モサカ氏が二〇一五年にペレス・アート・ミュージアム・マイアミ（Pérez Art Museum Miami）において企画し、極めて高い評価を得た現代美術展「関係の詩学（Poetics of Relation）」の解説文を、モサカ氏と同美術館のチーフ・キュレーターであるTobias Ostrander氏のご承諾を得て試訳したものです。モサカ氏、Ostrander氏、および同美術館のご協力に心より感謝申し上げます。

なお、本稿の原文（Tumero Mosaka, Distant Relations: Between Here and Elsewhere）が掲載されている『関係の詩学（*Poetics of Relation*）』の著作権は、ペレス・アート・ミュージアム・マイアミが保持します（©2015 Pérez Art Museum Miami, 1103 Biscayne Boulevard, Miami, FL 33132）。